

F.W.A.フレーベル『母の歌と愛撫の歌』の 教育方法学的検討

－子どもの成長のための方法的特徴－

児 玉 衣 子

序

近代幼児教育の創出者フレーベル (F. W. A. Froebel, 1782-1852, 独) は、彼の全く新しい幼児教育を解説するため、単行本としては唯一、『母の歌と愛撫の歌』(1844年頃発刊)を残した。この書は、彼の体系的幼児教育を彼自身が著した唯一の書であるとはいえ、一見したところ他愛ない遊び歌集である。そのため、これまで保育の遊びに役立てる以外には注目されなかったきらいがある。

また、歴史的に見るなら、フレーベルの死後、彼の創始した Kindergarten (日本では幼稚園と翻訳)と幼児教育は欧米に広がり日本にも輸入された。しかし19世紀後半から20世紀前半にかけて生じた世界的な社会構造の変化を背景に生じた教育の新思潮は、その心理主義、実験主義、あるいは民主主義、社会主義等の目指す社会形成に資する一員としての教育のあり方等々、さまざまな新しい教育課題を明らかにし、新しい実践を生み出した。そのような中で幼稚園は必要とされ発展したが、フレーベル自身の思想は旧思想として一般には顧みられなくなった歴史が存在する。そして、それは日本においても同様であった。

現在、日本においても幼児教育・保育は普及している。しかし、それは乳幼児期の教育を創造したフレーベルの願ったあり方を自分たちの保育のあり方を省みる場合の一助にするものではない。否、むしろそれ以前の問題として、そもそも彼の創りだした幼児教育・保育のあり方自体が知られていないとさえいい得るひとつの現実がある。いいかえるなら彼が無から有を創造して実践したところに存在したはずの理念、方法、教材等を全般的に視野に入れた実践的観点からの検討は、これまでなされなかったといっても過言ではない。そのため、筆者はこれまで『母の歌と愛撫の歌』に見出されるそれらに関する検討を通して、フレーベルの幼児教育・保育のあり方を探ってきた。

本稿は、これまでの10数年にわたる検討のまとめであるとともに、同書全体を通じてフレーベルが子どもの成長に従った乳幼児教育のために、教育・保育のあり方をどのように捉え、構成しているのかということを検討するものである。本稿をより詳細に理解いただくために、日本保育学会第41回大会論文集、日本ペスタロッcher・フレーベル学会紀要4号、日本乳幼児教育学会紀要第1号、本学紀要25、27、29、30、31号所収の拙論¹⁾を参照していただくと幸いである。

なお、先行研究に関して、『母の歌と愛撫の歌』は絵本であり遊びの具体的指導書でもあるところから、実践者によって大切に読まれ実践手引書として使用された歴史を有する。しかし、それ以外にはフレーベルの思想研究の検討に用いられた例を見出すのみであって、幼児教育・保育の実践的研究の立場から教育方法学的に検討を加えた研究はまだ見出されない²⁾。

第1章 フレーベルの幼児教育の構造

第1節 教育目的と子どもの発達との関係

『母の歌と愛撫の歌』において、教育の基本的課題である教育目的（大人の側の抱く教育の基本条件）と子ども自身との関係はどのように関わらせているのだろうか。これについては日本乳幼児教育学会紀要第1号所収の拙論において既述しているが、ここにもう少し詳しく取り上げたい。

『母の歌と愛撫の歌』全体の意図を語るために、フレーベルは「母の歌と愛撫の歌への指示」という解説項目において彼の子ども理解から始めて教育目的、教育方法、教育目標などに分類できる内容を語っている。以下、その内容を概観していこう。

第1項 解説項目「母の歌と愛撫の歌への指示」の内容

子どもの本質、子どもの発達理解

「母の歌と愛撫の歌への指示」（以下、「指示」と略記）の冒頭においてフレーベルは、まず彼の子ども理解を語っている。

フレーベルは子どもを誕生の時点から「一なるもの」それゆえに「統一実在」であって、感じたり知覚したり意識したりする以前から予感においてさまざまな本質を捉える存在と理解している。また子どもの生命表現は外面的には多様な表れをし、また内面的にも差異や対立さえ有しているが、それらは全て生命としてひとつに溶け合わされている。子どもは感じることに生命を生きており、生命から生じるあらゆる差異や対立の調整・調和を、子どもはさまざまな対象を知覚することによって魂を養い、意識することによって精神を育てるという形でおこなう。そして子どもは親（大人）に導かれてそのような過程を辿りながら外的なものを自己の内部に取り入れ、洞察し、再形成して外の世界をも自分をも統一した存在にして成長する。

ここにフレーベルの子どもの発達理解は、今日の発達理解と同様に、あくまでも内発的に捉えられているといえる。しかし同時に、発達を促す存在（母親）とそのあり方が明確に指示されることによって、フレーベルの発達理解は今日の発達心理学の発達理解と異なるということができる。しかし、今日の保育・教育の立場からすれば、保育・教育における発達とは、内発的でありつつ思慮深く導かれて初めて十全に発達するというフレーベルの発達理解は当然の内容であるといえる。

母親の役割

次に、母親とは、子どもをこのような存在と見なし、このような成長を予感して子どもと関わり、子どもが外の世界においても自らの生命においても統一の土台となる統一（フレーベルはそれを神という）を知るに至るまでの生き生きした感情に導くゆえに教育的存在として位置づけられる。

教育目的

その上で、フレーベルは母親の生涯の任務であり最高の喜びとは、子どもを外界・人類・自然界との生き生きした関係において、特に万物の根源であり父である神との一致において、子ども自身統一したものとして教育すること、神の子として教育し、教育して神の子とすることだと述べるのである。これは本書全体を通して子どもの成長を図るフレーベルの目指す到達点でもあって、フレーベルの教育目的といえる。

子どもの三側面

この教育目的実現のための方法、手段について、フレーベルは母親の自問自答という形式で次のような長い一文によって論を展開する。この一文は以下の訳文に示すように注目すべきことに内容が三分されている。「子どもの身体、四肢、感官、顧慮、注意、活動、奮闘の中に統一されている多様さと、その全体とによって以外、何によってそれができようか：まさに盛り上がりつつある子どもの自己感情、そうよ心から子どもの生命に触れる私や他者への人格的關係をこの子はもう区別できる、それによって以外何によってそれができようか：漸く薄明るくなり始めた子どもの精神の認知すること以外の何によってそれができようか」³⁾。

ここに乳幼児期の教育は、子ども独特の生命のつながりの中で子ども固有の本質に従いながら行なわれること、すなわち一言にいうなら子どもの発達を始点として発達に従って子ども独自の生命のつながりを広げることによってなされることが明らかにされる。また、その際、子どもの発達とは身体的側面、内なる自己感情の外なる表れとしての他者への人格的關係の側面、精神的側面という三側面が特に重視されて配慮されることが明らかにされる。

子どもの発達の状況とその育てられるべき方向性（教育目的の目標化）

しかも上掲のような発達の表れになって出てくる子どもの生命から生じる、自己の本質を生命の法則に従って自由に発展させたいという衝動は、人生において誤解、苦痛、悲哀などを起こさせるものでもある。そこで生命の法則に従って生じる衝動に対して、それを成長といいうる発展の方向性を指示された表現の方法と到達点がさまざまに述べられる。曰く「身体・四肢・感官の強化と発達とからそれらの使用へ、事物への着目から知覚へ、注意から観察と静観へ、個々のものを知ることから共通のものの発見によってそれらを結びつけることへ、思惟と結合した事物経験から純粹思惟へ。こうして健康な力強い感情から深く考える情操へ、外的観照から内的把握へ、外部の位置から内部の比較と判断へ、外部の結合から内部の決定へ。すなわち外部の理解から内部の理解、悟性の発展と完成へ。現象の外的覚知からその根拠と原因の内的了解へ、生命を把握する理性の発展と完成へ」。

これらは発達の諸相に与えられる教育目標と見ることができる。

教育目標の実現したときの子どもの姿

そして、これらの教育目標が達成されたとき、子どもの内心には個々のあらゆる実在の澄明な魂

児 玉 衣 子

の形象が観念 (Idee) として現われる。だから、このような過程を踏んで事物から形象へ、形象から表象へ、表象から精神的全体として事物の本質の把握へ、というこのような教育が行き着いたとき、子どもは自分の生命を全生命の一部として見渡し、子どもの生活は自然および人類と一致したもの、従って神とも一致したものになるだろう。

以上のように述べて、フレーベルは教育目標の段階を踏んだ達成によってそこに意図される精神性が実現されるとき、教育目的に至ると考えるのである。

第2項 「母の歌と愛撫の歌への指示」における内容の構造

前節においては、フレーベルの意図した乳幼児教育の目的・目標とその実現のための主張の内容を概観したが、この内容を教育方法学的な観点から見ると、内容と同等あるいはそれ以上に重要なものは、彼の論の展開の仕方である。

前節においても内容のまとまりを段落にして示したが、「指示」におけるフレーベルの論の展開の仕方は次のようである。すなわち、世の母親に対して、①彼の考える子どもの本質の提示→②子どもの成長・保育をどのように捉えるのかについての信念→③教育の目的の提示→④教育目的達成の方法・手段の出発点として特に教育的配慮の下にあると考えられる子どもの三側面の提示→⑤三側面における教育目標の設定から目的へ。

つまり、フレーベルはここで彼の創りだした乳幼児教育の構造をも示していることが明らかになるのである⁴⁾。

では、フレーベルが創りだした近代幼児教育の構造とはどのようなものだろうか？ 彼が示しているのは、子どもの本質理解を基盤にした上で、子ども自身から、すなわち教育的観点からは特に三側面に留意しながら一人の統一存在である子どもの状況から出発して、子どもの状況に従いつつ教育目的に向かうことである。ここに、子どもの側の発達という条件と大人の側の教育目的という条件とは対等、対置の關係に置かれていることが明らかになる。そして教育目的は、子どもが成長過程に示す発達的な諸相からそれらを糸口とする子どもの自覚的な営みへと導かれることによって教育的な諸目標に分けられ、過程化されて提示されるべきことが明らかにされるのである。

この構造から、近代幼児教育が近代学校教育と次の2点において全く異なることをも明らかになる。

第一に教師の役割と保育者の役割との相違についてである。すなわち教師の場合は教科による訓育と陶冶を通して子どもがひとりの人としての全面的成長（フレーベルの表現をもってすれば「統一」「一なる存在」としての成長）を目指す。それに対して保育者・親（フレーベルの考える教育的親）は子どもとの間に教科に該当する内容を介在させることによって子どもに相對するのではない。保育者・親と子どもとの關係は直接的關係である。

第二に、第一と関連するが教科と保育活動との性格が異なる。すなわち教科とは、将来ある学問領域に発展する知的、身体的領域の内容の基礎を子どもの発達に合致するように見計らって予め体系立て、それに従った教授・学習が目指される。それに対して幼児教育・保育の活動とは、乳幼児

期の発達から生じる衝動、興味、予感等に見合う表現を与えて、それらが認知、観察、静観、思考等へ導かれることを目指すのであって、それが学問的領域へ直接結びつくことを意図するものではない。つまり小学校教育の予備ではない。

フレーベルは、近代幼児教育をこのような基礎的な構造から創りだしているゆえに、近代幼児教育の父といいうる。

第2章 子どもへの教育的配慮

第1節 子どもの三側面への教育的配慮

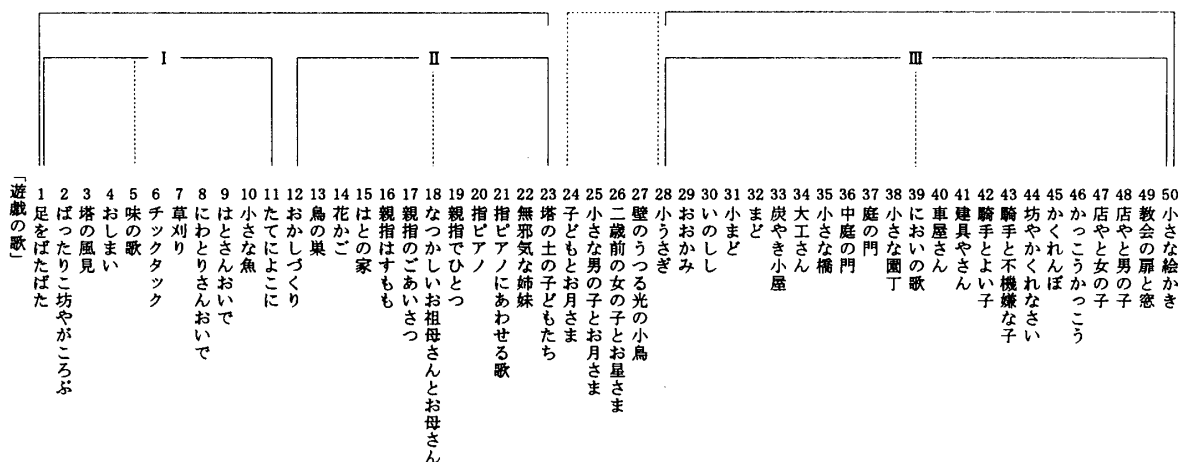
第1章第1節に掲げたが、フレーベルは具体的な子どもの教育への手掛りを子ども自身から捉えることを求めて、母親の自問自答という形式で子どもの把握を三側面から述べている。すなわち、①身体、四肢、感官、顧慮、注意、奮闘等挙げられるところの、身体的な動きを意識してそれに伴って身体運動と神経系統と精神とが連携、融合して経験される側面、②子どもの内的な自己感情およびその外的あらわれとしての母親や他者に対する人格的関係の側面、③薄明るくなり始めた精神の認知することの側面、である。

①については本書に下図のような構造の見出されることを既に明らかにした⁵⁾。そこから、遊戯や手遊びによって図られる身体運動については「遊戯の歌」50編が3段階に区分されていること。身体の中でも特に腕、手、指の使用に関して各段階毎に体幹部から末梢部へという流れを2回転しており、各段階毎に次第に高度化するいわば螺旋構造を描いて子どもの身体運動面への配慮がなされていることを明らかにした。

今日の保育実践になお参照されるべき点として、少なくとも次の2点を挙げる。

- (1) 「遊戯の歌」(12)「おかしづくり」(3才位と思われる…註1.④論文参照)まで、母親と子どもとの身体的接触(いわゆるスキンシップ)を伴う遊戯が多く見出される。

1. 子どもの身体、運動における本書の構成



点線は動作のない歌 実線は動作のある歌 区分は本書中の指示による。

児 玉 衣 子

	動作	区分	I	II	III
イ	肩、腕の運動		(3) 前腕の回内、回外 (6) (7) 肩の屈曲、伸展	(12) 肩の内転、外転	(40) 肩の内、外転と内、外旋。屈曲、伸展。 (41) 肩、肘の屈曲、伸展。
ロ	手首の運動		(4) 掌屈	(12) 背屈 (20) (21) 掌屈 (23) 背屈	(31) (32) 尺屈 (33) 背屈 (36) (37) 尺屈 (38) 橈屈(トクツ) (41) 背屈 (49) 尺、背屈
ハ	両手の非対称動作		(11) 左、指の内転、伸展 右、人差指の進展、4 本指の屈曲	(20) (21) 左、手首の掌屈 右、左指を1本ずつ軽 く押し下げる	(38) 左、前腕の回内、回外。 手首の橈屈 右、指の内転から外転 へ
ニ	指を分けて用いる		(9) 親指/4本指	(13) (15) (23) 親指/4本指	(30) 親指/4本指 (32) 親指・人差指/3本 指 (34) 親指/人差指/3本 指 (47) (48) 親指/人差指/ 中指・薬指/小指
ホ	指を1本ずつ動かす		(10) 恣意的に	(16) (17) (19) 親指から小指へ	(42) (43) (44) 小指から親指へ
ヘ	一つの身体部分の動作が歌に合わせて変化する		なし	(13) 親指 (15) 4本指 (23) (12) からの動作を行なう	(34) 人差指 (38) 右手指全部 (47) (48) 小指と親指

(2) いわゆる手遊びは、フレーベルによって保育に位置づけられて普及しているが、本来の狙いは、今日、忘れられているのではないか？ なぜ行なうのか、保育者の意識化が必要である。

②については、これも既に拙論において下図の構図を明らかにした⁵⁾。

そして、本書の主人公の子どもが人格的な関わりを作っていく対象を本書中に探って、それで対象、すなわち本書に設定されている「他者」とは人間に限らず動物、植物、天体等も含まれていること、子どもが人格的関係を結ぶ他者は一度に一対象であること、成長に従って広げられていること等を明らかにした。

ここから、今日の保育実践に対して次のような示唆を得る。

(1) 子どもが無意識に惹かれるもの、特に動植物、天体等の子どもの受けとめ方と大人の受けとめ方との相違についてである。例えば月は幼児にとって「私についてくる」存在であるが大人にとっては天体であり無機物である。今日、子どものこのような感性はアニミズム、相貌化等に類型化されて、子どものそのような感性が導く成長については童話的な世界に限定して考えられている。

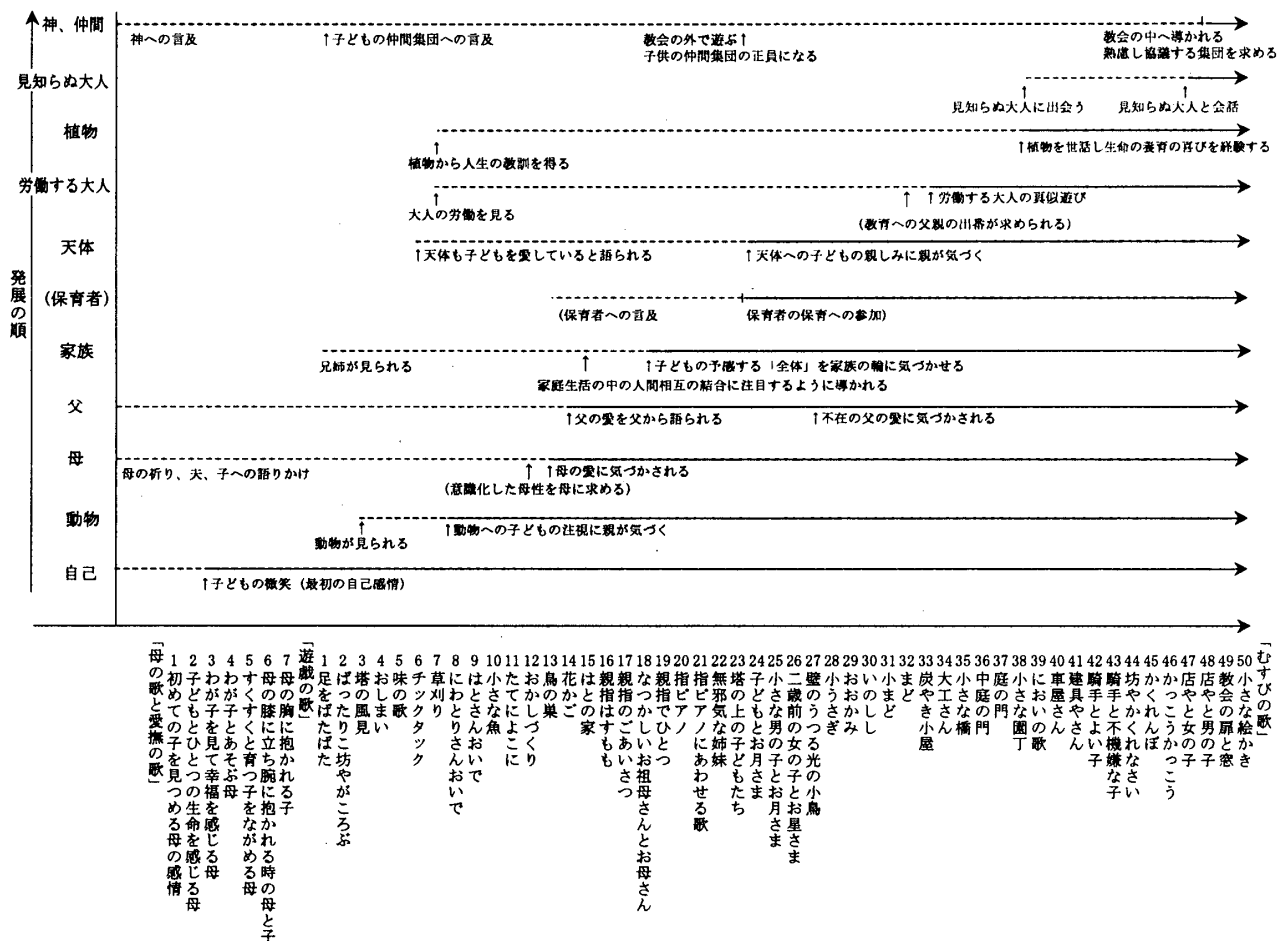
しかし、フレーベルは子どもの感性の世界に添うところから始めて、子どもの成長に従って大

人の受けとめ方へと導く。例えば子どもは植物から花や香によって語りかけられつつ花卉の形状や手触りから花を知ることへも導かれる。そのような教育によって、子どもは自らの世界を親しい存在（人格的でありつつ客観的にも知る存在）を拡大して成長していく。

(2) このような、人格的關係が人間に限定されない子ども自身の感性が受けとめられ、その感性において広げられる人格的關係が子どもの情操を含む人間性の形成に細心に構成される。つまり大人による動物、植物、鉱物、という分類は分類の仕方の一種であって、人格的關係とは人間のみ限定される関係ではないことが明らかにされる。それは、ひいては人間性ということの捉え方にも関わる。

(3) 「生命の合一」という関係性は、大人と乳幼児とが人間としての対等性において成り立っていることが明確である。これは、保育・教育において、ともすれば大人が子どもを理解するという一方向性において子どもが捉えられることに対して、基本的に注意を促す。大人は子どもの育つ方向性、成長の内容に影響力と責任を有するとともに、人間としての対等性について常に誠実であることが求められる。

2. 子どもの「他者へ的人格的關係」の発展



児 玉 衣 子

③については、これも既に下図のような構成が見出されている。

また構図から見出される特徴として以下の5点が挙げられた⁷⁾。

- (1) 「遊戯の歌」50編は、記述されている内容から3段階5区分が設けられている。
- (2) 「母の歌と愛撫の歌」7編と「遊戯の歌」5区分の歌は、各区分内のほぼ中央の歌の説明において非常に強調した内容の説明がなされている。これはそれらの歌が各区分内で中心的な内容であることを視覚的にも内容的にも訴えたくてそのようになされていると思われる。
- (3) 「遊戯の歌」第一段階(10編の歌)は、生後約6ヵ月と見られる赤ちゃんとの遊びに関する説明と絵本として見る子どものための留意点と、いわば2層構造に書かれ、第10編目の歌でそれが一致してほぼ3才位になって次の段階へと入っていく。
- (4) 「遊戯の歌」に設けられた3段階はそれぞれに各段階目標をもっており、各歌に言及される精神的内容はそれら全体によって段階目標の達成を意図されている。
- (5) 子どもに芽生え、そして導かれるべき「精神」的内容については、過去10年にわたる検討(本学紀要25、27、29、30、31号所収)から明らかになるように、フレーベルの汎知学とでも表現したくなる幅広い内容が盛り込まれている。また方法的にも注目すべき留意点がさまざまに凝らされている。その内容をこの僅かな数行に要約することは不可能なので拙論の参照を乞いたい。

その上で(5)に関して、なお保育における今日的意義をいくつか述べておきたい。

第一に、子どもの「薄明るくなりゆく精神」への関わり方は、常に子どもの特性に即して対象への人格的關係を土台にしてなされているという点である。これは子どもが自らの身体・五感による感情・感覚をもって対象を注意深く知覚し、識別し、意識化することと不可分なゆえに、心理学的にアニミズムといって済ませることとは根本的に異なる重要性を示唆している。

第二に、第一の意義の帰結になるが、身体・感官の使用および事物の名前や性質の識別(「遊戯の歌」第一段階)、知識、愛、労働(「遊戯の歌」第二段階)、情操と性格と意志の訓練(「遊戯の歌」第三段階)等に挙げられる各段階の時期に固有な課題は、すべて子どもの「精神」の成長に結びついている。つまり乳幼児期の人格的關係とは、子どもが自分の身体・情緒・精神を不可分にしてその対象を知覚し、識別し、意識化し、その対象の本質を予感して自分の「精神」に収めていくことである。この土台の上に学齢期の子どもの「精神」は、概念および概念操作の獲得によって飛躍的に広げられ鍛えられることになる。

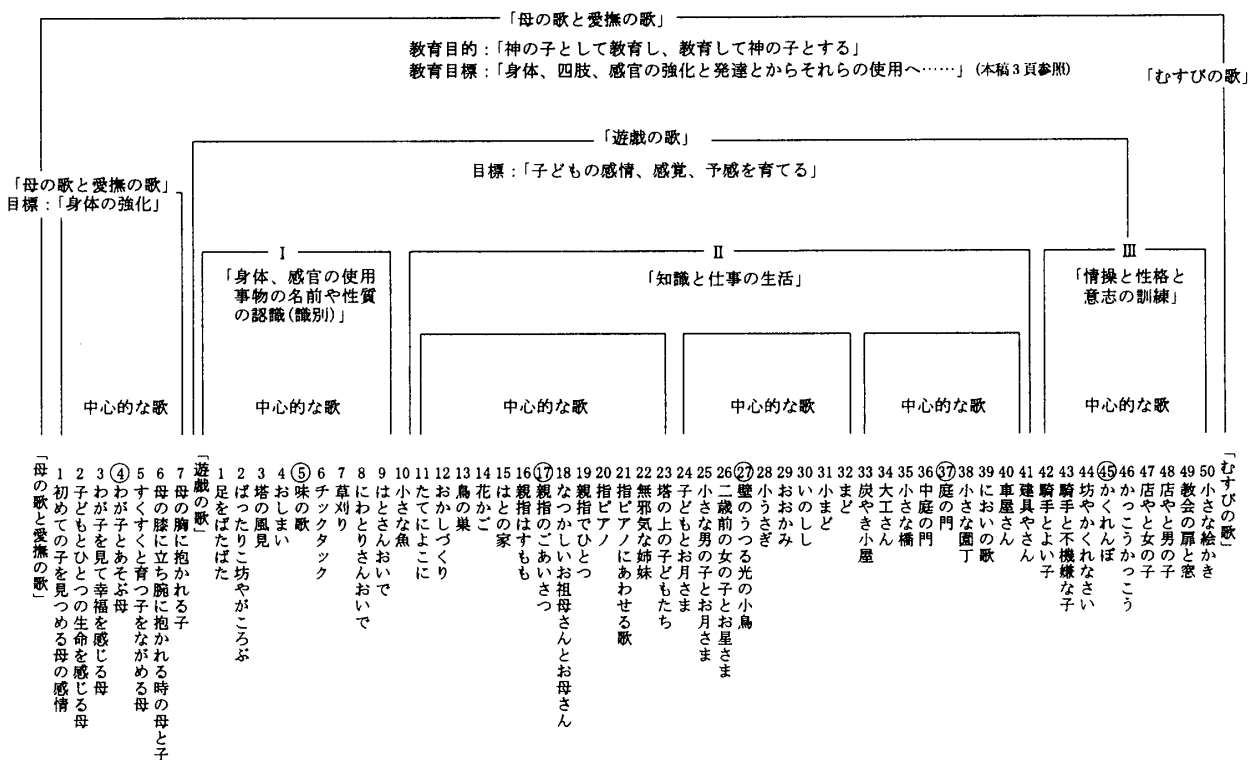
第三に、身体・運動機能の発達の側面から見た場合、本書は3段階に分けられており、各段階内で休息をはさんで合計6回の朝顔型螺旋形に、用いる身体・運動機能が構成されていることについては既述した。子どもの「精神」についても、各段階の課題が前面にあるとはいえ同様の図式が認められる。

例えば、事物の名前や性質の識別を含んだ知識、愛、労働の3種類については、子どもの意識化の過程には、①特に意識せずに五感にふれている、②絵、遊戯、会話などを伴う意識化、③遊びの内の、遊びを通して実際らしさを味わう、④実際の大人の知識や労働への部分的参与、という過程

が認められる。

また、題材についても、具体的に五感で捉えて知ることのできる個々の事物から概念化（例、個々の虫から昆虫へ）がなされる。あるいは愛については親の瞳、太陽光線の明るさと暖かさなど、五感による把握可能な形で教えられた後、心に持ち続けることができる、つまり心情による把握可能性に気づかせられていく、という一つの題材についての展開の図式が認められる。

3. 子どもの精神に関する本書の構成



第2節 教育方法としての「生命の合一」と、それによってもたらされる「予感」

第1項 教育方法としての「生命の合一」

『母の歌と愛撫の歌』の最初は「母の歌と愛撫の歌」と名づけられた7編の歌である。7編の内、3編は母親が神や誕生したわが子や夫に語りかける歌であり、4編は母親が子どもの身体や顔の各部に触れて愛撫して子どもと遊ぶための歌である。この愛撫によって母親と愛児との間に齎されるものは、生命がひとつに溶け合うような感情・感覚である。さらに「遊戯の歌」50編に入っても最初の10編、つまり子どもが生後6ヵ月位から3歳位に至るまでと見られる歌の間、遊戯は親が子どもの手をつなぐ等して、体をふれあって楽しむ遊び方が多い。

フレーベルは「生命の合一」「生命の一致」等に翻訳されるところの、この生命がひとつに溶け

児 玉 衣 子

合うような感情・感覚を、思想として述べるばかりではなく、実際に子どもの体にふれ、手を取り合い、歌いながら眼差しを交わしあう、そのような具体的行動を指示して語っているのである。言いかえるなら彼は「生命の合一」を、親にとっても子どもにとっても、その発達・成長にとり根本的かつ実地的な方法として本書の中に設けているのである。

さらに、身体のかれあいを伴わない遊びの時期に入っても、子どもが自己の生命を「合一」させる対象に無自覚に惹きつけられ、気づかずに注視するなどして対象を広げるにつれて、親は傍からその対象を見て取り、歌や遊戯や会話にして、その対象を子どもにとって「親しみある相手」(人格的關係にある相手)にしていく。

つまり絵本、遊戯、歌、ゲーム、積木等の教材や手段は、それらを遊ぶことによって経験されるそれらの遊び自体との「生命の合一」、遊びの題材にされた対象との「生命の合一」、あるいはその中で経験される仲間関係における「生命の合一」等が目指されるための手段であり、「生命の合一」とは活動を活動たらしめている要素、すなわち理念としてばかりではなく方法としても用いられている。

しかも実際手段としての愛撫や歌を伴う遊戯は、この生命の合一を通して感情・感覚の高まりを起こすところに生じる子どもの身体的躍動や運動、意図的動きや注意、身体を動かしながら注意を払い、さらに相手に合わせた動きをしてみることを生み出す。つまりフレーベルの意図する三側面の内の「身体的側面」に働きかける。

また、遊びによって、子どもは遊びの題材になる対象を親しみをもって意識化し、愛する感情・感情を育てていくことになる。フレーベルはこのような対象を「他者」と位置づける。

「他者」すなわち「母の歌と愛撫の歌」7編では母親だけに限定されていた生命の溶け合うような人格的關係の対象は、「遊戯の歌」50編になると本格的に展開され、人間だけでも親から始まり、家族、近隣の顔見知りの好意的な大人、保育者、地域の働く人々、見知らぬ人へと広げられていく。それだけではなく動物(身近な小動物から野獣まで広げられる)、植物、太陽や月などの天体にも等しく結ばれていく。そして最終的にそれらの全てを統べ治める神へと結ばれる。つまり「生命の合一」は、それらさまざまな「他者」に対する子どもの親しみ、つまりはそれらの対象に対しての人間らしさ、人間性ともいえる感情・感情を育てる基本的方法とされている。

フレーベルは彼の重視する三側面の内、内的な自己感情の外的表れである「母親や他者への人格的關係」については、まさに「生命の合一」という方法によって生み出される自己および他者の人格性、その自覚に裏付けられた他者への関係、その結果齎される子ども自身の他者への情動的、知的信頼に満ちた世界の広がりを用意しているのである。それは、子どもの人間性といえる他者を親しみをもって意識化し、愛する感情・感情の成長のための働きかけである。

このような自己感情の表れとしての「他者との人格的關係」については、『人間の教育』(1826)において彼が「共同感情」と述べている子どもの感情を発展的に展開させたものであろうと考えられることについては、既に拙論において明らかにした⁸⁾。

さらに、子どもの「精神」的側面、つまり子どもの知的欲求とは、基本的に「他者」との生命の

合一によって人格的に対象（「他者」）を探ってその意味を見つけようとする子ども自身の無自覚な欲求と考えられている。しかもフレーベルは、このような子どもの情緒的、人格的に彩られた知的欲求は単に対象自体の意味を探るところのいわゆる科学的興味にとどまらないで、その対象が自分のまだ知らない何かもっと大きい世界に意味をもつのだろうという子どもの「予感」をも刺激し、涵養していると考えている。だから、子どものこのような特質を損なわないように子どもの「精神的側面」を援助し導くことが意図されるのである。

第2項 「生命の合一」による子どもの「精神」の成長と子どもの「予感」との関係

フレーベルは、特に幼児期において損なわれてはならない資質として幼児の「予感」を語る。彼が捉えている幼児の「予感」とは、事物がその形態、度量衡（極まるところに数感覚が置かれる）、色彩等において把握されることを超えて、あるいは生物がいつ、どのように、その生命の営み（誕生、食餌、行動）を行なっているのかという目に見えて把握されるところを超えて、いわばその本質において把握されるはずだという感じであるといいうる。事物にしろ事象にしろそれらの本質には次の2種類、つまり形態、度量衡、色彩、生態、等の科学的性質において捉えられ、それらの法則性へつながっていく本質と、それらの存在意義ともいいうる精神的な本質との両方の本質が存在する。これら2種類の本質は大人においても極まるところ繋がっているものだが精神の営みとしては別個に探求されている。しかし、フレーベルは、幼児期にはこれら2種類の本質は分けられずにしかも確実にまさに「予感」として感じられていると考えている。

だから、フレーベルは乳幼児期の子どもがその四肢を十分に用いることによって五感を通して事物や現象を見、聴き、嗅ぎ、触り、味わうように意図する。同時に子どもが見、聴き、嗅ぎ、触り、味わう事物について、それらが子どもにとって意味あるものとなり子どもの世界に位置づくような説明を（親の口を通して）行なう。『母の歌と愛撫の歌』という彼の唯一の体系的保育書では、親は、子どもの示す自覚していない注視や「これ何？」「どうして？」等の発問に表し始める精神発達に対して、その注視や発問の対象を親子の遊戯や会話にする。そのようにして、親は、子どもがその対象を単に子どもの発達に応じた科学性で捉えられるだけではなく自分と通じ合う親しみをもって識る対象にしていって子どもの世界を広げていく。つまり乳幼児期の子どもは、気を惹かれる人間や動物だけではなく気を惹かれる事物や事象までも子どもにも分かる科学性と人格性をもって受けとめ、理解していくことによって自らの「薄明るくなりつつある精神」を育てて強めていく。

そして、子どもが受けとめ、理解していくことはそれで満足して終わることではなく、さらに、今はまだ明確に分からないけれどもいつかもっと明らかに分かるであろう何か、よそよそしく不安を起こさせるものではなく希望や期待をもって自分に明かされると感じられる不思議さともいいうる奥深い何か、それが明らかになるときはさらなる幸せ、充足をもたらすと子ども自身に感じられる何か（それをフレーベルはあらゆるものの根源となる統一実在とする）への期待を子どもにもたらす。それをフレーベルは子どもの「予感」と表現していると考えられる。

第3章 世界観を与える教育

第1節 近い目標と遠い目標と両方の存在

『母の歌と愛撫の歌』の中の「遊戯の歌」50編の各歌の説明から気づかされるのは、その歌の狙いとする精神的な意義が子どもの年令に合った時期の内容の説明だけに終わっていないものが多いということである。その歌で対象にしている年令の時に子どもが気づかされる精神的なことから、子どもの成長後には意味もさらに発展した精神的内容になるといって説明が二重構造になされている場合が多い。

このことは、フレーベルが乳幼児期を、まさに成人後まで続く人生の土台の時期として位置付け、そのような展望をもって乳幼児教育を創りだしていることを明らかにする。

乳幼児期の課題は乳幼児期に十分に経験して初めて少年期へ入っていくこと、人生はそうに充実したひとつの時期が次の時期の到来をもたらす、そのような順々の積み重ね方をして成長して初めて十分に生きられていることを、彼は既に『人間の教育』において明確にしていた。そのような彼の考え方のみに馴染んでみると、『母の歌と愛撫の歌』に見出される文言は、一見、彼のそれまでの主張と矛盾するように思われる。

しかし、これはフレーベルの主張が変化したのではなく、乳幼児期の捉え方が『人間の教育』の頃に比べて具体的になりより細やかになった結果、そのようになったのだと思う。なぜなら、乳幼児期の次にくる学齢期は2種類の精神的働きが其々に分化して鍛えられ成長する時期であり、それらが別個の働きでありつつしかも自覚して通じ合わせることによる統合性を持つに至るのは、その後になるからである。その意味で、乳幼児期の未分化に2種類の精神的働きが行なわれる時期に語られる精神的課題が、成人後の発展した意味についても解説されて語られることになるのではないかと考えられる。

第2項 世界観を与える教育

「生命の合一」によって広げていかれる子どもの世界は次第に子どもの行動圏、生活範囲を広げていく。絵（「欄外装飾画」）および「欄外装飾画の説明」の中から私たちが捉えることのできる子どもの行動は、親と一緒に、親を離れて兄弟について出かける、兄弟を離れて同年輩の仲間数人と一緒に、異年令の遊び仲間集団の一員になって、というように次第に自立の度合いを強めていき、ついにはいわゆる「ごまめ」「みそっかす」ではなく、遊びの仲間集団の正式メンバーの一員としての独立性を獲得していく。

また行動範囲についても、親の目の届く距離から次第に親の目は届かなくても仲間集団の一員として親が安心している範囲へ、さらに親も知っている場所ではあるが目の届かない場所へ一人で出かける、親と一緒にでなければ行けない遠い所へ親と一緒に出かける等々、次第に広がっていく。そ

のような中で「生命の合一」を起こす対象も目に見える対象を超えて、目に見えなくてもその存在を親しく信頼をもって受けとめられる対象へと広げられ、広がっていく。

乳幼児の世界とは、一面においては行動範囲に規制される世界であろう。家族・家庭を基地にして自分一人、あるいは仲間と一緒になら行動できる距離範囲において経験するものごとを通して、子どもは自分の世界をつくる。今日においても、たとえ遠方の祖父母と電話で会話ができるといえども、基本にはその祖父母と実際に会って親しんでいるからこそ電話も可能なのであって、この意味で乳幼児の世界は実際に自分で見、聞き、五感で感得する世界によってつくられる。

同時に私たちは、たとえば同じ道を歩いても大人と子どもとでは、事物の見え方も異なれば気になるもの、惹かれるものも非常に異なることも知っている。つまり同一の行動範囲にいても感動や好奇心を起こさない場合と感動や好奇心を起こす場合とでは世界は異なってくる。しかも乳幼児期の感動や好奇心は、それ自体は自発的、発達のであるにしろ、傍に居る大人の支えがあって初めて感動や好奇心は生き生きと働き始める。いいかえるなら感動や好奇心という自己の内部を育てる要素は、信頼する大人の共感、励まし、指導という外的な支えを得て初めて育つ。逆に信頼する大人からの無関心や否定を受け取るなら育たないばかりでなく、歪んだり潰れてしまう場合さえあることをフレーベルは既に『人間の教育』から力説している。だからこそフレーベルは子どもが身体的、情操的、知的に融合した成長をするために、子どもの成長に関わる大人に「生命の合一」を基本方法として語られる。

「生命の合一」によって広げられる世界とは、自分にとって不安をおこさせる世界ではなく基本的に自分が好意をもって関わりをもつ世界である。フレーベルが本書に示す「他者への人格的關係」とは子どもが一方的に自らの仕方のみを対象に押しつけて知ることではない。知合うため、愛するために大人によって多様なあり方が示され、教えられ、それを子どもが経験することが目指される。例えば、乳児期に果実の熟した味と未熟な味との区別を味わった子どもは、幼児期になると未熟のもたらす毒に用心を払うことも果実との関わり方として身につけていく。そのようにして対象と関わりをつくることが愛であって、そのような愛をもって対象を広げ、深めてつくっていく世界である。

そして、子どもが親しんでいく対象は人間だけでも親、家族、近所の好意的な大人、保育者、地域の働いている大人、見知らぬ人へと広げられていく。また、動物も小動物から家畜、野獣へと広げられていく。植物についても自然の樹木、草花から植物栽培へと導かれる。さらに風や雨等の自然の事象、太陽や月等の天体、等々さまざまに本書の中に繰り広げられた「他者」は、最終的に、それら全てを統べ治める人格的超越神によって、子どもの世界における「他者」は、そのつながりを円環にする。

このように、子どもは自らを取り巻く世界を親しみをもって広げていくこと、まだ理解できないことについても将来、理解できるようになるという期待をもって物事に関わっていくこと、世界をそのように子どもに伝えること、そのような世界観が本書に用意されていること、それが本書におけるフレーベルの乳幼児教育の大きな特徴であるといえよう。

児 玉 衣 子

註

本稿に用いている『母の歌と愛撫の歌』の各歌の題名は、莊司雅子訳「母の歌と愛撫の歌」『フレーベル全集』第5巻、玉川大学出版部刊のものを採用させていただいた。ただし、原著の目次の歌の番号に従い、(29)「狼と猪」を(29)「狼」(30)「猪」に分け、以降、歌の番号を1番ずつずらさせていただいた。

なお初版と目される本については京都大学教育学部所蔵の貴重図書を、初版の復刻本については京都大学文学部所蔵のプリアー版を用いた。

- 1) ①児玉衣子『『母の歌と愛撫の歌』における動作の系統性』日本保育学会41回大会論文集、1988、268-269頁。
- ②児玉衣子「F. W. A. フレーベル『母の歌と愛撫の歌』における子どもの『他者との人格的關係』の発展」日本ペスタロッシー・フレーベル学会紀要4号、1991、37-54頁。
- ③児玉衣子「F. W. A. フレーベル『母の歌と愛撫の歌』の教育方法学的検討—子どもの『薄明るくなり始めた精神の認めること』について—」日本乳幼児教育学会紀要1号、1992、27-40頁。
- ④児玉衣子「F. W. A. フレーベル『母の歌と愛撫の歌』の教育方法学的検討—「遊戯の歌」(1)-(10)に見られる子どもの「精神」の成長—」北陸学院短期大学紀要25号、1993、1-21頁。
- ⑤児玉衣子「F. W. A. フレーベル『母の歌と愛撫の歌』の教育方法学的検討—「遊戯の歌」(11)-(23)に見られる子どもの「精神」の成長—」北陸学院短期大学紀要27号、1995、1-22頁。
- ⑥児玉衣子「F. W. A. フレーベル『母の歌と愛撫の歌』の教育方法学的検討—「遊戯の歌」(24)-(32)に見られる子どもの「精神」の成長—」北陸学院短期大学紀要29号、1997、13-26頁。
- ⑦児玉衣子「F. W. A. フレーベル『母の歌と愛撫の歌』の教育方法学的検討—「遊戯の歌」(33)-(41)に見られる子どもの「精神」の成長—」北陸学院短期大学紀要30号、1998、11-25頁。
- ⑧児玉衣子「F. W. A. フレーベル『母の歌と愛撫の歌』の教育方法学的検討—「遊戯の歌」(42)-(50)に見られる子どもの「精神」の成長—」北陸学院短期大学紀要31号、1999、1-15頁。
- 2) 20世紀始めの教育新思潮台頭以前、本書は世界的に保育実践の手引書として大切に学ばれた。本書を解説する当時の代表的な思想書として米国、S. Blow, "Letters to a Mother" (1900, D. Appleton & Co.) が挙げられる。しかしこの後も、本書はフレーベルの思想研究の立場から取り上げられることはある(シュブランガー、莊司雅子、H. ハイラント等)が、方法論的研究はこれまで全く見出されない。
- 3) 本稿の訳文は茅野蕭々訳『母の歌と愛撫の歌』岩波書店、1934を採用させていただいた。これは莊司訳に比べてより逐語訳に近いという理由による。ただし翻訳用語に筆者とどうしても解釈の違いが生じる場合、筆者の考える用語を採用させていただいた。
- 4) 註1)の③論文参照。
- 5) 同上。
- 6) 註1)の②論文参照。
- 7) 註1)の⑧論文参照。
- 8) 註1)の②論文参照。

なお、本稿は、日本ペスタロッシー・フレーベル学会第17回大会(1999)における個人発表に検討を加えたものである。